大阪大谷大学 IR 委員会

2019 年 7 月

2019 年度（令和元年度）新入生アンケートの結果と経年変化（近３年）報告書

2019 年度データ回収状況（期間：5 月 8 日～5 月 30 日）

	登録者数(人)	回答者数(人)	回答率(%)	2018 回答率(%)
日本語日本文学科	60	58	96.7	91.2
歴史文化学科	57	56	98.2	98.3
幼児教育専攻	104	104	100.0	99.2
学校教育専攻	94	94	100.0	98.9
特別支援教育専攻	36	36	100.0	93.9
人間社会学科	93	91	97.8	97.6
スポーツ健康学科	104	102	98.1	92.9
薬学科	133	131	98.5	92.4
合計	681	672	98.7	95.6

どの学科も、未回答者への督促・指導に丁寧に取り組むことができた。100%にならなかったのは、不登校・長欠の学生の存在であり、面接指導ができなかったためである。今後、これ以上のデータ回収率はのぞめないところ（最高点）まで到達したと理解している。一般に「Web 方式でのアンケートは、回収率が低い」と言われているが、本学教職員の熱心な取り組み、敬意を表すとともに、学生の協力に感謝したい。今後もこの状態が維持されるよう、教職員・学生への啓発活動に努めていきたい。

以下は、全学共通の質問についての分析結果である。表中の「連続」は「2017,2018,2019 年連続して増加、あるいは減少」した項目に、「増」、「減」と表記した。

問１　大阪大谷大学に入学して満足していますか

	人数(人)			割合(%)			
	2017	2018	2019	2017	2018	2019	連続
満足している	221	221	209	32.5	32.6	31.1	
やや満足している	217	289	304	32.0	42.7	45.2	**増**
どちらとも言えない(普通)	207	135	139	30.5	19.9	20.7	
あまり満足していない	22	20	11	3.2	3.0	1.6	**減**
満足していない	12	12	9	1.8	1.8	1.3	
合計	679	677	672				

＊「満足している」と「やや満足している」を合わせた肯定的回答（満足群）は 76.3%であり、昨年度比＋1.0%、一昨年度比＋11.8%となった。入学後１ヶ月時点での満足群は 75%前後で安定している。

一方、「あまり満足していない」と「満足していない」を合わせた否定的回答（不満足群）は昨年度比－1.9%、一昨年度比－2.1%で徐々に減っている。また、どちらとも言えない（普通）は昨年度比＋0.8%、一昨年度比－9.8%で、全体として不満足群が減少し、同時に満足群が 75%前後で安定してきた。

問２　本学を受験校に選んだ理由は何ですか（複数回答可）

	人数(人)			割合(%)			
	2017	2018	2019	2017	2018	2019	連続
理念･校風	34	23	25	5.0	3.4	3.7	
教授や講師	35	30	49	5.2	4.4	7.3	
学びたい学科･専攻がある	455	443	428	67.0	65.4	63.7	減
少人数教育	78	91	82	11.5	13.4	12.2	
資格･教採対策指導の充実	87	112	103	12.8	16.5	15.3	
就職に強い	51	47	40	7.5	6.9	6.0	減
現場体験を多く積める	43	42	26	6.3	6.2	3.9	減
資格･免許が取得できる	348	311	300	51.3	45.9	44.6	減
他大学に入学できなかった	189	160	175	27.8	23.6	26.0	
入学の難易度が自分にあう	126	114	109	18.6	16.8	16.2	減
通学に便利	134	99	117	19.7	14.6	17.4	
人から勧められて	153	108	119	22.5	16.0	17.7	
クラブ活動に魅力	---	64	66	---	9.5	9.8	
その他	20	12	10	2.9	1.8	1.5	減

＊2 年連続で割合が増加した項目はなかった。一方、「学びたい学科・専攻がある」「就職に強い」「現場体験を多く積める」「資格・免許が取得できる」「入学の難易度が自分にあう」は、連続して減少している（「その他」は内容が特定できないので、考察の対象外とする）。就職・現場体験・免許資格といった“実践力養成”に対する期待感が後退しつつあるのではないかと思われる。ここ 1～2 年は、卒業生に対する求人状況が悪くない（売り手市場と言われている）と言われている、大学入試のハードルが下がりつつある、などの楽観的状況も手伝って、「○○になりたい」と動機付けられて、入学する学生が減りつつあるのではないだろうか。学修への動機付けが弱いと、大学での学修活動から離れ、手軽に充実感を味わえるアルバイトや学外コミュニティに関心が向きやすくなり、ディプロマ・ポリシーとの乖離幅が大きくなることが懸念される。この調査結果を 1 年次の教育活動に反映し、大学での学修活動で充実感が味わえるような工夫が求められる。

問３　学生生活の中で特に力を入れて取り組みたいことは何ですか（複数回答可）

	人数(人)			割合(%)			
	2017	2018	2019	2017	2018	2019	連続
資格・免許の取得	568	509	519	83.7	75.2	77.2	
合格するための勉強	411	368	355	60.5	54.4	52.8	減
専門分野の知識・理解	284	274	274	41.8	40.5	40.8	
幅広い教養	187	191	179	27.5	28.2	26.6	
人間関係を築く	200	192	202	29.5	28.4	30.1	
部活・サークル活動	250	248	247	36.8	36.6	36.8	
語学の習得	71	70	70	10.5	10.3	10.4	
趣味やアルバイト	235	224	238	34.6	33.1	35.4	
ボランティア	147	133	118	21.6	19.6	17.6	減
インターンシップなど	90	81	61	13.3	12.0	9.1	減
海外留学・研修	31	37	34	4.6	5.5	5.1	
その他	2	4	2	0.3	0.6	0.3	

＊2 年連続で割合が増加した項目はなかった。中でも「合格するための勉強」が連続して減少していることは、問 2 で指摘した「学修への動機付けが弱くなっているのではないか」という懸念を裏付けている。人数こそ多くはないが、「ボランティア」「インターンシップなど」への関心も薄れてきており、大学が取り上げ、推奨している学修活動が周知されていないか、知っていてもそれ以外に彼らを引き付けているものがあるのではないかと推測される。大学での学修の魅力を体感できるようにすることが求められている。短期間で学修の魅力を体感できるプログラム「学生のやる気を引き出す取り組み」を作るのは容易ではないが、喫緊の課題である。

一方、本稿では「本学の新入生全体を１集団とみなしている」ため、学修指導に役立てるための分析結果を得ることが困難だともいえよう。各学科の DP との乖離を把握する質問を組み込むようにしてはどうだろう。さらに、個人に着目し、授業開始前に行った社会人基礎力を測定するためのアセスメント(PROG)の結果とも関連付け、個別学修支援の仕組みをつくることが、大学での学修に対する期待度を増す鍵であると考える。

問４　今後、学生生活を送るうえで不安がありますか（複数回答可）

	人数(人)			割合(%)			
	2017	2018	2019	2017	2018	2019	連続
授業(勉強)	465	423	428	68.5	62.5	63.7	
就職	326	303	289	48.0	44.8	43.0	減
教員･公務員試験対策	260	240	232	38.3	35.5	34.5	減
資格･免許取得	377	324	331	55.5	47.9	49.3	
教員	52	40	31	7.7	5.9	4.6	減
友人(先輩)	108	90	118	15.9	13.3	17.6	
部活･サークル	109	93	95	16.1	13.7	14.1	
アルバイト	141	96	90	20.8	14.2	13.4	減
通学	91	85	71	13.4	12.6	10.6	減
パソコンの活用	164	158	138	24.2	23.3	20.5	減
学費	181	161	129	26.7	23.8	19.2	減
新生活環境への適応	118	86	95	17.4	12.7	14.1	
英語(外国語)	192	162	159	28.3	23.9	23.7	減
特にない	23	33	43	3.4	4.9	6.4	増
その他	2	3	2	0.3	0.4	0.3	

＊2 年連続で不安が減ったのは、15 項目中（「その他」を含む）7 項目であった。「就職」「教員・公務員試験対策」などの大学卒業を見通した勉学関連項目だけでなく、「アルバイト」「パソコンの活用」「学費」など直近の学生生活にかかる不安要因も減少している。これは「不安がなくなってきている」のではなく「大学生活に対する関心が薄れてきている」ことの現れではないだろうか。人数は多くはないが、「特にない」という学生が、3.4、4.9、6.4（%）と 1.9 倍に増えていることは、大きな問題である。昨年度は、「不安が減っている」ことをプラス評価したが、全体を俯瞰すれば、「今後の学生生活への不安がなく、希望に満ちている」のではなく、大学生活に対して無関心である層が増えているととらえるべきであろう。彼らに対し早急に対策を講じなければならない。

【総括および大学の対応】

2018 年度は、前年（2017 年）度と比較し「学びたいこと・目的意識・目標を明確に持ち、免許や資格取得への取り組みを熱心に考えている新入生が多いことがうかがえた。特に、本学入学に対する満足度が有意に変化している点は、望ましい変化と評価できる。」と総括した。また、本年度も入学満足群は 75%前後で安定しており、「学びたい学科・専攻がある」ことを受験校に選んだ理由とする学生は約 64%、「資格・免許が取得できる」を選んだのは約 45%であり、大学での学修に期待を抱いている新入生が少なくない。

しかし、2017、2018、2019 年度を通して経年変化を見ると、「大学での学修に関心の低い層が増えている」ことが明確になってきた。昨年度も、「学生生活そのものへの希望が低下し、無関心になってきているのではないかと危惧される。今後、他の調査とも関連付けながら、時系列での変化に注目していきたい。」と警鐘を鳴らしたが、本年度の結果から、そのことがはっきりと捉えられた。つまり、新入生の多様化（無関心層の増加による 2 層化）が進んでおり、ポリシーと乖離した「大学ミスマッチ」群をどう受

け入れていくかについて、各部署で具体策を早急に講じる必要があると考えられる。少なくとも、1 回生のスタート時点ですでに判明している大学ミスマッチ群に着目し、彼らの満足感に応えられるコース、メニューも用意する必要があるだろう。1 年前期の必須科目受講期間が終了したところで自らの進路を考え、後期からは選択科目を減らして、コース別に決まった科目を受講するといったカリキュラムはどうだろう。手続き上困難であることは想像に難くないが、ミスマッチであるが故の居心地の悪さも、半年間ならば、がまんすることも可能であろう。その期間が長くなると、疎外感が増し、欠席が増え、中途退学へとつながると推察される。

学生一人ひとりに対する個人情報に基づく個別学修支援を充実していくことが今後の課題である。

以上